

水稻での葉いもちの発生が平年よりやや多い状況です。

穂いもちの発生を防ぐため、圃場での発生に注意し、
適期に防除を行いましょう。

[現在の発生状況]

- ① 7月上旬現在、病害虫防除所巡回調査圃場の葉いもちの発病度¹⁾（本年値 3.5、平年値 1.7）および発生地点率（本年値 51%、平年値 27%）はともに平年よりやや高い（表 1）。
- ② 一部圃場では補植用の置苗でいもち病が多発し、その周辺株でも発病が認められている。
- ③ 気象予報によると、向こう 1 か月の降水量は平年より多いと予測され、発生を助長する条件である。

1) 発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

表1 病害虫防除所巡回調査圃場における葉いもちの発生状況（令和4年7月上旬調査）

地域	調査 地点数	発病度 ¹⁾			発生地点率 (%)		
		本年値	平年値 ²⁾	順位 ³⁾	本年値	平年値	順位
県北	8	2.0	1.7	4	25	22	5-6
県央	15	5.0	2.3	1	53	33	2-3
鹿行	6	1.0	0.6	3	33	22	3-4
県南	19	3.4	1.8	3	47	28	4
県西	9	4.1	1.3	2	89	26	1-2
全県	57	3.5	1.7	2	51	27	2

1) 株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

2) 平成24年～令和3年の10年間の平均値

3) 本年を含む過去11年間における本年値の順位。（5-6は5位から6位まで同じ数値であることを示す）

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は、いもち病の発生源となるため、現在水田に置苗がある場合には、水田およびその周辺に放置せず、直ちに持ち出して適切に処分をする。
- ② いもち病が発生しやすい水田（育苗箱施用剤を使用していない水田、日当たりや風通しの悪い水田等）を中心に見て回り、葉いもちの発生を認めたら、直ちに防除を行い、上位葉への進展を抑える。
- ③ いもち病菌がイネの穂に侵入しやすいのは、出穂直後から出穂後 14 日位までである。この期間に降雨が続く場合は、穂いもちの発生に注意が必要である。
- ④ 穂いもちを対象とした液剤の散布適期は、穂ばらみ末期～穂揃期である。葉いもちが多発し、上位葉に病斑が進展している水田では、防除を徹底する。
- ⑤ 殺菌剤を複数回使用する場合、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤を選択する。